

ハイデガー的形而上学的論理学の可能性について

山下智弘 (慶應義塾大学)

本発表の目的は、形而上学的論理学としての存在論という枠組みにマルティン・ハイデガーの哲学を位置づけることは可能かどうか、という問いに肯定的に答えることである。

まず存在論、ないし形而上学(本発表ではこの二つの語を同義として扱う)の位置づけについて説明しよう。これらの語は歴史を通じて一義的に用いられてきたわけではない。たとえばハイデガーにとって、超感性的なものの学としての意味は「形而上学」という語から抜け落ちている。ハイデガーにとって形而上学とは、存在者が存在者であるというだけで有するある種の規定についての学であり、形而上学の仕事はその規定、すなわちカテゴリーを獲得しその意味を明らかにするというものである。存在者一般の形式の学という形而上学の概念は、もちろんハイデガーに特有のものではなく、アリストテレス以来の由緒正しいものであるといえよう。

しかし、形而上学はカテゴリーの学であるという説明は、それほど内容豊富なものではない。カテゴリーがいったいいかなるものなのか、いかにしてそれ以外のものから区別されるのか、どのようにしてその意味と必然性を説明すればよいのか、という問いに答えないうちが、我々は形而上学を理解したことにはならない。これらの問いを等閑にする形而上学者は、カントの言葉を借りれば「独断的形而上学」の謗りを免れない。

カテゴリーとは何らかの概念であるということ抜きにして、カテゴリーというものを理解しようとする者はほとんど存在しないだろう。そうだとすれば、カテゴリーは他の諸概念と同じく、判断ないし命題のうちに位置づけられることによって初めて理解されるのではないか。このように考えるなら、形而上学とは命題の学ということになる。カテゴリーは存在者一般の規定なのだから、形而上学は命題の一般形式の学だということになる。そして、命題一般の学としての存在者一般の学というこの概念こそ、本発表が形而上学的論理学と呼ぶものである。

では、形而上学的論理学としての形而上学という考え方は、どの程度自明なものなのであろうか。実際のところ、これは由緒正しい考え方でありながら、決して現代において一般的ではない。

形而上学的論理学という名称は、形而上学についてのみならず論理学についての特定の考え方を表現している。すなわち、論理学とは文字通りの意味で命題一般、思考一般についての学であるということである。こうした考え方は唯一のものではない。むしろ、論理学とは推論の秩序についての理論であり、それに反して思考することも可能であるという考え方のほうが今日では一般的だと思われる(Goldfarb 1979; Rödl 2005, Einleitung und Kap. 1)。

では、形而上学的論理学とハイデガーの哲学はどのように関係するのか。ハイデガーの哲学は、現代の論理学以上に形而上学論理学とは縁遠いものであるという考えが根強い。実際、ハイデガーの言葉遣いはそうした見方を引き起こしやすいものとなっている。ハイデガーは、その著者と見なされる未完の『存在と時間』において、「文法学を論理学から解放するという課題」(Heidegger 1967, 165)を提示し、また命題は「解釈の派生的様態」にすぎず、対象の自然な捉え方を変化させ、特定の「概念構成」(Begrifflichkeit)に押し込めてしまうと述べている(Heidegger 1967, 157 f.)。これは、彼が存在論および彼の「現存在分析論」のうちでの命題の地位をかなり低く見積っていることの証拠であるように見える。ハイデガーのこうした主

張を命題に対する全面的な軽視と捉えないまでも、『存在と時間』を論理学とは異なるものを扱う書として読むことは自然である。

だが、そうだとすれば、カテゴリーの本性、意味、必然性についての問いにハイデガーの哲学はいかにして答えるのだろうか。カテゴリーとは何であり、ハイデガーによれば存在の意味であるとされる時間はいったい何の意味なのか。時間とはどのようなもので、それは諸カテゴリーをどのように演繹することを許すのか。従来の解釈方針でこれらの問いに十分に答えることができないということは、『存在と時間』における時間性の解釈にまだまだ満足なものが見出されないということから明らかであるように思われる。

そこで本発表はむしろ、ハイデガーのいう現存在が基本的には本質的に命題的な世界に生きているという見方を擁護することによって、『存在と時間』および時間的にその周辺に位置する諸著作・諸講義を、形而上学的論理学を扱ったものとして解釈することができるということを示す。命題ないし論理学に対する反対者としてのハイデガーという描像は、最近ではそれなりに見直されてきている(荒畑 2009, Kap. 4; Golob 2014, Kap. 2)。本発表は、それらの先行研究を踏まえつつ、それらがハイデガー的存在論の解釈に与える根本的な影響を考察するものとなるだろう。

本発表の概要は以下の通りである。

まず、命題を派生的なものとするハイデガーの記述を形而上学的論理学と両立するものとして解釈し直す必要がある。ここでは第一に、ハイデガーのいう命題が、我々が一般的に命題と呼ぶもののごく一部のみを指しているということが明らかになる。また第二に、ハイデガー的な意味での命題の構造より根源的であり、それを可能とするとされる現象が、それ自体我々のいう命題に当てはまるものであるということを示す。これによって、ハイデガー的な意味での命題の派生的性格は、(我々の広い意味での)命題から命題への派生を意味するものとなる。すなわちそれは、ある論理形式から別の論理形式への変化なのである。二つの論理形式の違いは、命題的であるか否かではなく、現存在すなわち命題的な振る舞いの主体についての現象学的分析から獲得されているか否かという点に求められる。

次に、ハイデガー哲学において命題形式およびカテゴリーの原理としての役割を持つ要素を説明することによって、ハイデガーを形而上学的論理学者として解釈する方法を積極的に提示する。周知の通り、『存在と時間』周辺の時期のハイデガーにとって、存在論の原理を提供する基礎存在論は現存在分析論であり、存在一般の意味は時間である。現存在はその一人称性によって特徴づけられるので(Heidegger 1967, 41 f.)、ここでは一人称性と時間との関係を扱うこととなる。どちらも発表者が過去に扱った主題ではあるが、そこではハイデガーの主張を否定的に評価せざるを得なかった(山下 近刊)。本発表ではそれを進歩させ、整合的で肯定的な解釈を提示する。

Goldfarb, Warren (1979). Logic in the Twenties: The Nature of the Quantifier. *The Journal of Symbolic Logic* 44, 351–368.

Golob, Sacha (2014). *Heidegger on Concepts, Freedom and Normativity*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.

Heidegger, Martin (1967). *Sein und Zeit*. 11 Aufl. Tübingen: Max Niemeyer.

Rödl, Sebastian (2005). *Kategorien des Zeitlichen. Eine Untersuchung der Formen des endlichen Verstandes*. Frankfurt (Main): Suhrkamp.

荒畑靖宏 (2009) 『世界内存在の解釈学——ハイデガー「心の哲学」と「言語哲学」』、春風社。

山下智弘 (近刊) 「ハイデガーと存在論的責任——合理的なものの時間性」『現象学年報』34。